

【旧約聖書日課】エレミヤ書 50章4～7節

4 その日、その時には、と主は言われる。

イスラエルの人々が来る

ユダの人々も共に。

彼らは泣きながら来て

彼らの神、主を尋ね求める。

5 彼らはシオンへの道を探ね

顔をそちらに向けて言う。

「さあ、行こう」と。

彼らは主に結びつき

永遠の契約が忘れられることはない。

6 わが民は迷える羊の群れ。

羊飼いたちが彼らを迷わせ

山の中を行き巡らせた。

彼らは山から丘へと歩き回り

自分の憩う場所を忘れた。

7 彼らを見つける者は、彼らを食らった。

敵は言った。

「我々に罪はない。

彼らが、まことの牧場である主に

先祖の希望であった主に罪を犯したからだ」と。

【使徒書日課】ペトロの手紙一 2章11～25節

¹¹愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいの身なので、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい。¹²また、異教徒の間で立派に生活しなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしてはいても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神をあがめるようになります。¹³主のために、すべて人間の立てた制度に従いなさい。それが、統治者としての皇帝であろうと、¹⁴あるいは、悪を行う者を処罰し、善を行う者をほめるために、皇帝が派遣した総督であろうと、服従しなさい。¹⁵善を行って、愚かな者たちの無知な発言を封じることが、神の御心だからです。¹⁶自由な人として生活しなさい。しかし、その自由を、悪事を覆い隠す手だてとせず、神の僕として行動しなさい。¹⁷すべての人を敬い、兄弟を愛し、神を恐れ、皇帝を敬いなさい。

¹⁸召し使いたち、心からおそれ敬って主人に従いなさい。善良で寛大な主人にだけでなく、無慈悲な主人にもそうしなさい。¹⁹不当な苦しみを受けることになっても、神がそうお望みだとわきまえて苦痛を耐えるなら、それは御心に適うことなのです。²⁰罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになる

でしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです。²¹あなたがたが召されたのはこのためです。というのは、キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。

²²「この方は、罪を犯したことがなく、その口には偽りがなかった。」

²³ののしられてもものしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。²⁴そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。²⁵あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 10章1～6節

¹「はっきり言うておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。²門から入る者が羊飼いである。³門番は羊飼いは門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。⁴自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、ついて行く。⁵しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」⁶イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことが分らなかった。

羊の名を呼んで【こども説教のために】

教会に集められてきた皆さんは、お互いに名前を呼んで挨拶されているでしょうか。名前が分からない人のために、子どもたちや教会員の方たちには、名札をしてもらうようお願いしています。たとえ口にしなくても、お互いの名前をおぼえて挨拶し合うことを、教会は大切にしてきたからです。

主イエスは、「羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す」とおっしゃいました。主イエスの時代の人たちは、「主は羊飼い」（詩編 23:1）と教えられていました。主イエスの弟子たちは、主イエスこそがまことの「良い羊飼い」（ヨハネ 10:11）と信じ、教えるようになりました。その羊飼いが、ご自分の羊として、わたしたち一人ひとりの名を呼んでくださるのです。わたしたちを、安全なところに導き入れてくださるために、また、連れ出して危険なところも行けるようにしてくださるために、一人ひとりの名を呼んでくださるのです。わたしたちは、自分の名を呼んでくれる人とでなければ、安心して一緒に行くことができないのです。

弟子のペトロは、主イエスに「わたしの羊の世話をしなさい」（ヨハネ 21:16）と言われました。ペトロは、主イエスが名を呼ばれる一人の人の名を呼ぶことから始めました。それが、主イエスに名を呼ばれた者たちの教会の始まりです。互いに名を呼び合うとき、主が名を呼んでくださっているのです。

困いに入る

先週、この礼拝堂で H 兄の葬送を営みました。コロナ禍が始まるまでは、ご夫婦で日曜日と平日の集会に欠かさずおいでくださっていました。コロナ禍で弱られ、以後、ここに足を運ばれたことは数えるほどでしたが、最期の葬りのときを、ここで迎えていただくことになりました。それは、生前、ご夫婦でお決めになられていたことでした。奥さまの H 姉は、若いころに京都の教会で洗礼を受け、今はわたしたち石神井教会の教会員として名を連ねられています。けれども H 兄は、生涯を無教会主義のキリスト者として貫かれた方でした。長年、ご夫婦がそれぞれに、無教会の信仰によって歩いて来られたのです。お二人がそろって同じ交わりの中で信仰生活を歩まれたのは、石神井教会においでになるようになられてからのことです。

教会は、「共に立つ」ことを大切にしてきたところです。主イエスの言葉を用いれば、同じ「困い」に入る群れの一員であることを、何よりも大事にしてきたのです。「羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」（ヨハネ 10:16）ということこそ、主イエスがご自身の命を捨ててまで成し遂げようとされたことだと、教えてきました。「困いに入っていないほかの羊」（同）があれば、「迷い出た一匹」として捜し出し、群れに迎え入れることを、主の御心としてきました。「小さな者の一人でも軽んじないように気をつけなさい」（マタイ 18:10）と、主はおっしゃられたのです。だれも「孤独」であってはいけない。そうであればこそ、「共に立つ」ことを大切にしてきたのです。

けれども、わたしたちが「共に立つ」ことを大切にするのは、実のところ、一人ひとりが「独り立つ」者となることができるようになるためです。

キリスト者の霊的な生き方に示唆を与える多くの著作を残したヘンリ・ナウエンは、しばしば、「孤独（ロンリネス）」であることと「独り立つ（ソリチュード）」こととはまったく違う、ということを強調しました。「孤独」は人の霊性（内面）を弱め、破壊してしまうこともあるのです。そうであれば、人は「共に立つ」ところを見出すことが必要です。自分がそこに居てもよい、共にいてもよい、とされるところで、互いに「共に立つ」ことを知るので、だれ一人、「孤独」によって自己を失ってしまうことがあってはいけないのです。けれども、わたしたちは、「共に立つ」ことによって、かえって自己を埋没させてしまうこともあります。「自分」を見失ってしまうのです。もちろん、余計な「自我」は捨てたほうがよいこともあります。主イエスも「自分を捨て…わたしに従いなさい」（マタイ 16:24）とおっしゃいます。捨てるべき「自分」もあるのです。けれども、それは、わたしたちが「何者でもなくなる」ことではないでしょう。自分の「名」を呼ばれる者として、一人の者として、「独り立つ」者となることが、主の御心であるはずなのです。

迷える羊の群れ

何よりも、主イエスそのお方を、わたしたちは、「独り立つ」お方として知っています。主イエスは、弟子たちと共に歩み、罪人や徴税人であろうと、敬虔なファリサイ派の人であろうと、分け隔てなく食卓を共に囲み、「共に立つ」ことを率先して実践してみせてくださったお方です。「共に立つ」ことを徹底してみせてくださったのです。そのお姿の中に、弟子たちは、「独り立つ」お方を見るようになったのです。「共に立つ」ためにこそ、揺るぎなく「独り立つ」者であることをご自身に課されたお姿を、弟子たちは知り、伝えたのです。

使徒ペトロが見たのは、屠られる小羊のようなお姿の主イエスでした。羊の群れの中から取られ、罪の贖いのために犠牲とされる小羊の姿の中に、弟子たちは、「独り立つ」お方としての主イエスを見出したのです。

先週、そして今週と、旧約聖書日課は、「エレミヤ書」から定められています。H 兄が残された文章の中で、預言者エレミヤについて触れたものがあります。預言者エレミヤを、激しい迫害の中にあっても神の前に「独り立つ」ことに徹した信仰者として、H 兄は、ご自身の理想とされていたのかもしれませんが。けれども、エレミヤの「独り立つ」は、しばしば「孤独」に陥るものでもあったと言わざるを得ないかもしれません。エレミヤには、「共に立つ」ことを許されるところが失われていたからです。

バビロニアによってユダ王国が滅ぼされていく時代、王侯貴族から始まって、多くの者が、ユダ・エルサレムの地からバビロンの地へと移って行きました。「捕囚」と呼ばれますが、バビロンの地は、ユダ・エルサレムよりも豊かで、安全で、自由な生活が許されていたのです。エレミヤがかつて「共に立つ」交わりにあずかっていた仲間たちの多くが今やバビロンの地で新しい生活を始めている一方で、エレミヤは、エルサレムの地に残され、「共に立つ」ことを拒む者たちの傍らで「孤独」と戦わざるを得なくなっていました。エレミヤは、自分自身が「独り立つ」者であるために、「共に立つ」交わりを回復することを願わずにはいられなかったのです。「わが民は迷える羊の群れ」と預言を告げるとき、エレミヤその人こそが、「迷える羊」として「孤独」のうちにさまよっていたのです。

「独り立つ」者となるために、わたしたちは、「共に立つ」のです。そのわたしたちは、「迷える羊の群れ」かもしれません。そうであればこそ、わたしたちを導く「羊飼い」を迎えるのです。「囲い」の「門」から、ほかでもない「良い羊飼い」をお迎えするのです。主をお迎えするのです。このお方が、わたしたちを「独り立つ」者として、連れ出してくださるでしょう、それぞれの生きるべきところへ、それぞれの遣わされていくべきところへ。